

名 広 遺 跡
—B 調 査 区—

1987

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

名 広 遺 跡

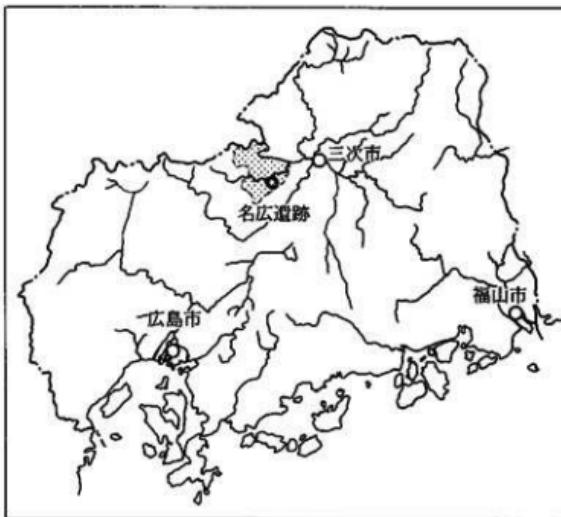
—B 調 査 区—

1987

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

例　　言

1. 本報告書は、県営ほ場整備事業（船佐地区）に係る名広遺跡B調査区（高田郡高宮町房後 235 番地の 1）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、広島県可部農林事務所から委託を受けて、財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 発掘調査は、調査研究員 山田繁樹、太田史代、調査補助員 船井向洋、向田秀明が、遺物の実測・製図及び写真撮影は太田が中心となって行った。
4. 本文は、山田（I・II）、太田（III・IV・V）が分担して執筆し、太田が編集した。
5. 本書で使用した遺構の表示は次の通りである。
SB：住居跡・建物跡、SK：土壙、SX：性格不明の遺構、P：柱穴
6. 掲図と図版の遺物番号は同一である。
7. 本書に掲載した第1図は、建設省国土地理院の1:25,000の地形図（前川、安芸横田）を1:30,000に縮少して使用した。
8. 本書に使用した方位は、全て磁北である。
9. 本遺跡の理解を深めるために、本書と同時に刊行される広島県立埋蔵文化財センターの「名広遺跡－A調査区－」を併読されたい。



名広遺跡位置図

目 次

I はじめに	(1)
II 位置と環境	(2)
III 調査の概要	(4)
IV 遺構と遺物	
(1) 壁穴住居跡	(5)
(2) 掘立柱建物跡	(14)
(3) 土壙	(20)
(4) その他の遺構と遺物	(21)
V まとめ	(23)

図 版 目 次

図版 1-a 遠景 (西から)
b 全景 (東から)
c 全景 (西から)
図版 2-a SB5a・5b (南から)
b SB7a・7b (南から)
c SB2 (東から)
図版 3-a SB6 (北から)

図版 3-b SB3 (南から)
c SB10・11 (東から)
図版 4-a SB12・14・15 (西から)
b SB16 (東から)
c SK1 (南から)
図版 5 出土遺物

挿 図 目 次

第1図	周辺主要遺跡分布図 (1:30,000)	(2)
第2図	周辺地形図 (1:1,000)	(4)
第3図	遺構配置図 (1:150)	折り込み
第4図	SB 5a・5b 実測図 (1:60)	(5)
第5図	SB 5 出土土器 (1:3) 及び土製品実測図 (1:2)	(6)
第6図	SB 7a・7b (1:60) 及び出土土器実測図 (1:3)	(8)
第7図	SB 2 (1:60) 及び出土土器実測図 (1:3)	(9)
第8図	SB 6・SB 8 実測図 (1:60)	(10)
第9図	SB 6 出土土器 (1:3) 及び石器実測図 (1:6)	(11)
第10図	SB 3 (1:60) 及び出土土器実測図 (1:3)	(13)
第11図	SB 10 実測図 (1:60)	(14)
第12図	SB 11 実測図 (1:60)	(15)
第13図	SB 12 (1:60) 及び出土土器実測図 (1:3)	(16)
第14図	SB 13 実測図 (1:60)	(17)
第15図	SB 14 実測図 (1:60)	(17)
第16図	SB 16 (1:60) 及び出土土器実測図 (1:3)	(18)
第17図	柱穴内出土土器実測図 (1:3)	(19)
第18図	SK 1 実測図 (1:20)	(20)
第19図	SK 1 及び SK 2 出土土器実測図 (1:3)	(20)
第20図	SX 2 (1:40) 及び出土土器実測図 (1:3)	(21)
第21図	包含層出土土器実測図 (1:3)	(22)

I は じ め に

昭和57（1982）年6月、高宮町から広島県教育委員会（以下「県教委」という）に、県営は場整備事業船佐地区予定地内の埋蔵文化財の有無並びに取り扱いについて照会があった。これを受けた県教委は船佐地区10工区分（205ha）のうち下房後工区（30.6ha）の分布調査及び試掘調査を行い、名広遺跡（約7,000m²）が存在することを確認した。このためその取扱いについて高宮町及び事業を施工する広島県可部農林事務所高田地方耕地事業所は県教委と協議を行い、遺跡と工事計画との調整がはかられた。この結果、切土となるA調査区230番地の1（約250m²）と道路予定地及び切土となるB調査区235番地の1（約500m²）については現状保存が困難なため、事前に発掘調査を行い記録保存を図ることになった。

なお、この事業は耕地区画の形質の変更改善、用排水路・道路・暗渠排水の整備、耕地の集団化等を実施し、農業の生産基盤である耕地を生産性の高い条件に整備すること目的としている。

発掘調査は、文化庁と農林省との協議に基づき文化庁から都道府県教育委員会へ通知された「農業基盤整備事業等と埋蔵文化財の保護との関係の調整について」（昭和50年10月20日府保記211号）により経費は、事業者負担分（80%）と農家負担分（20%）に分けて行うことになった。このうち事業者負担分を財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「財団センター」という）が、農家負担分を広島県立埋蔵文化財センター（以下「県立センター」という）が行うことになり、財団センターはB調査区について広島県可部農林事務所との間で委託契約を締結した。調査は昭和61（1986）年5月19日から6月27日まで実施した。なお6月21日、高宮町教育委員会、県立センターと共に遺跡見学会を開催したところ約200人の参加があった。以上のような経過を経て発掘調査は終了した。本報告書が地域の歴史研究に少しでも寄与できれば幸いである。

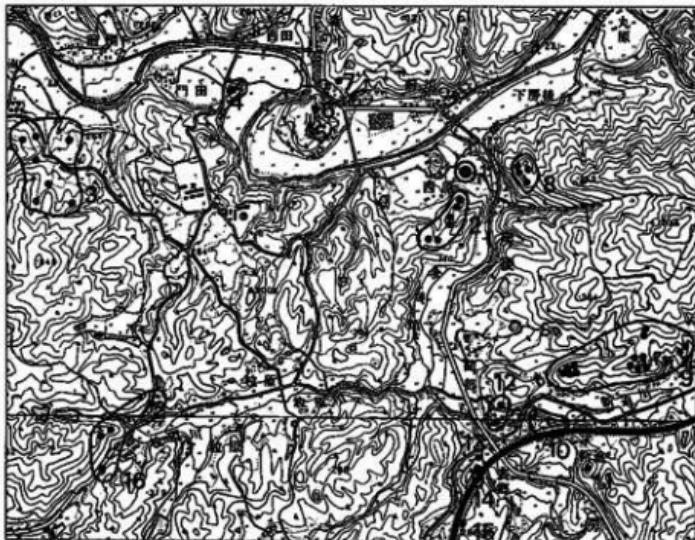
調査にあたっては、県教委の御指導を得るとともに、地権者の吉貞玖一氏ほか地元の方々、広島県可部農林事務所高田地方耕地事業所、高宮町土地改良区、高宮町教育委員会、県立センターから多大な協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。

II 位置と環境

高田郡高宮町は、広島県の北部に位置する中国山地山間の町である。東は三次市、西は高田郡美土里町、南は同郡吉田町及び甲田町、北は双三郡作木村及び島根県邑智郡羽須美村と接しており、東西約13km、南北約14km、総面積は124.4km²である。そのうち山林は79%を占め、耕地は11.3%である。江の川の支流である生田川やその支流の房後川などに沿って狭い沖積地があり、集落はこの沖積地に面して丘陵裾に点在している。また、支谷がよく発達し谷水田も営まれている。このような地理的環境の高宮町も近年、中国自動車道の高田インターチェンジが設けられて山県郡千代田町や広島市などへの交通も便利となり、発展が期待されている。

本遺跡は、生田川と房後川の合流地点の南側に位置している。遺跡付近の地形は、鞍掛古墳群のある標高約280m、水田からの比高40~50mの低丘陵の北裾が標高230m付近で傾斜変換線となり、一部は畠地が営まれている。さらに北に下って標高230m付近から水田となり、生田川の南岸まで緩やかに地形が下っている。本遺跡はこの標高230m付近にあり、生田川南岸の水田地帯を見渡すことができる。

町内で最初に人類の痕跡が見られるのは、現在のところ縄文時代後期からである。杉の



1. 名広遺跡
2. 鞍掛古墳群
3. 成安古墳群
4. 門田古墳
5. 明見田遺跡
6. 明見原古墳
7. 大追古墳
8. 下房後古墳群
9. 新追古墳群
10. 新追南古墳群
11. 表郷古墳群
12. 勝部古墳群
13. 白鳥古墳
14. 白鳥遺跡
15. 寸志名遺跡
16. 梶原古墳群

第1図 周辺主要遺跡分布図 (1:30,000)

原遺跡は、この時期の土器（磨消繩文）と磨製石斧が出土しているほか、炉跡が確認されており、集落跡の可能性がある。弥生時代の遺跡は中期の明見田遺跡、後期の向原遺跡、中之郷遺跡が知られているにすぎなかったが、中国自動車道建設に伴って中期末葉の新迫南遺跡、寸志名遺跡、後期の白鳥遺跡などが調査されており、近年この時代の様子が次第に明らかになりつつある。

古墳時代になると遺跡数は、増加するがその大部分は古墳である。古墳は約200基有余確認されており、そのうち大半は円墳で後期のものと考えられる。なお、白鳥古墳は前方後円墳で、新迫第2号古墳は方墳の可能性がある。本遺跡周辺の鞍掛古墳群は径10~20mの円墳6基からなり中期から後期にかけて成立したとみられ、眼下に広がる本遺跡周辺の沖積地を農業経営の基盤としていたと推定される。このほか発掘調査が行われた後期の古墳には後原第1・2号古墳、成安第1~7号古墳、横山古墳、原山古墳、仁王丸第8号古墳などがある。このうち成安第3・4号古墳は内部主体が小型の竪穴式石室であり、横穴式石室が一般的に普及する直前の様子を知るうえで興味深い古墳といえる。

このほか古墳時代前半期の集落跡として寸志名遺跡、祭祀遺跡として後谷遺跡、古墳時代から歴史時代にかけての窯跡として矢賀迫第1・2号窯跡、明連窯跡があり、この時代の遺跡の一端を知ることができるが資料的にはなお不足している。今後、集落跡や窯跡などの遺跡の増加が予想される。

平安時代の高宮町は「倭名類聚抄」にある高宮町の訓観郷と高田郡の舟木郷に比定されている。この二郷のうち訓観郷は現在の大字来女木の一部、舟木郷は大字舟木の一部に推定されており、本遺跡の付近は地形的にみて大字舟木に近いことから舟木郷の一部であったと推定される。しかし、当該期の遺跡は現在のところ確認されていないため不明な部分が多い。

中世の遺跡としては、佐々部氏の面山城、牛首城、高橋氏の猪掛城等10か所余りの山城が知られている。この頃の集落は、山陰の尼子・山陽の毛利軍の往来道である陰陽道沿辺や山城の周囲に存在していたことが予想されるが、現在のところ本遺跡で確認したのみで未調査の部分が多く、今後の調査が待たれる。

参考文献

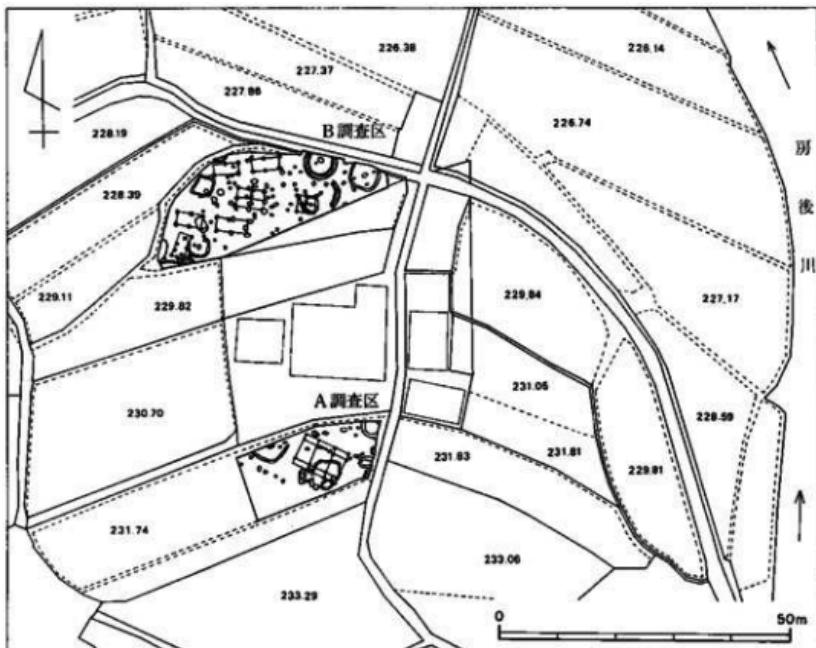
高田郡誌編纂委員会 「高田郡誌（上巻）」 昭和47(1972)年

高宮町史編さん委員会 「高宮町史」 昭和51(1976)年

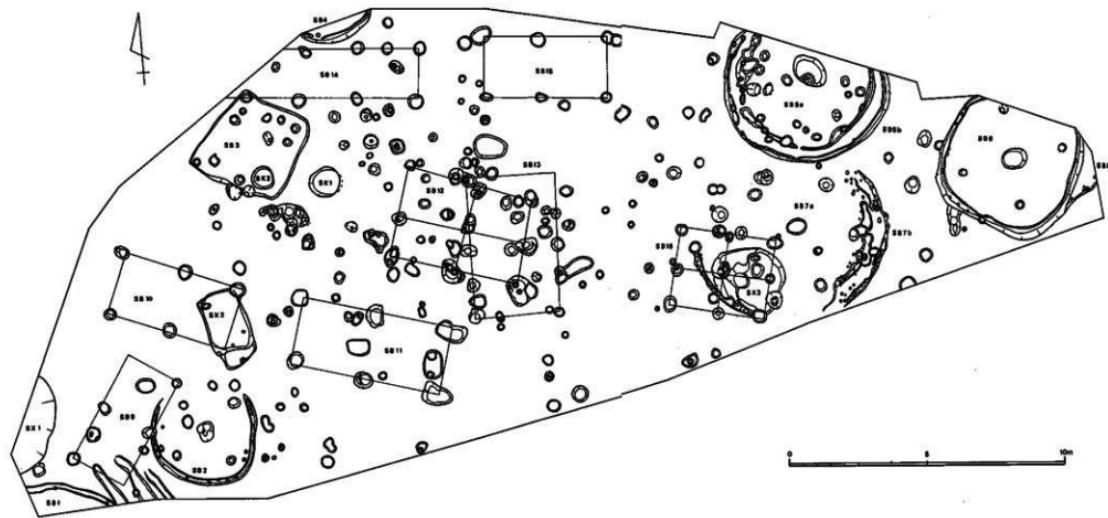
広島県教育委員会 「中国総貿易自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(2) 昭和54(1979)年

III 調査の概要

本遺跡の現状は水田で、遺跡のほぼ中央は宅地となっている。B調査区は本遺跡の北端部にあり、A調査区とは約30m離れている。土層堆積状況は、上から耕作土・床土・暗茶褐色粘質土、黄褐色粘質土（地山）となっており、暗茶褐色土層では遺構の確認が困難であったため黄褐色土上面で検出した。検出した遺構は、竪穴住居跡10軒（弥生時代4・古墳時代3・時期不明3）、掘立柱建物跡8棟、土壙2基、不明遺構3基である。弥生時代の竪穴住居跡にはSB 5a・5b・7a・7bがあり、建て替えを行っている。古墳時代の竪穴住居跡SB 2・3・6のうち、SB 3からは、炭・焼土が出土している。竪穴住居跡の出土遺物には土器（壺・甕・高杯・鉢）のほか砥石、作業台石、土製勾玉がある。掘立柱建物跡は、1間×2間・2間×2間（縦柱）などが平行を東西方向に配列している。出土遺物が僅かであるため明確な時期はとらえ難いが、古墳時代後期～中世の建物跡であろう。



第2図 周辺地形図 (1:1,000)

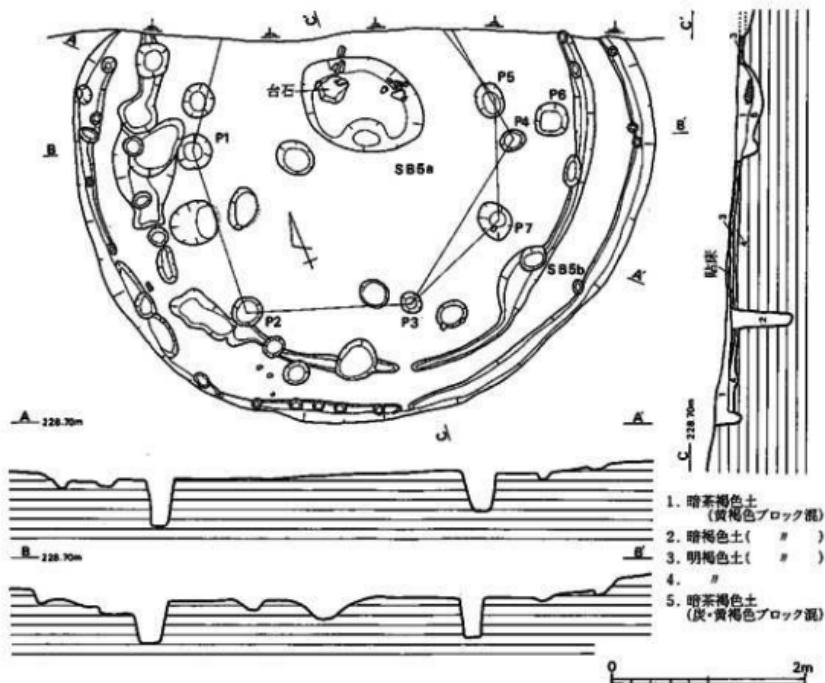


IV 遺構と遺物

(1) 穹穴住居跡

SB 5a・5b (第4図、図版2a)

調査区の北東に位置し、北側を農道に削平されているが、いずれも平面形が円形の穹穴住居跡で、2軒の重複が認められた。SB 5aは径4.8~5.0mで、床面積は18~20m²である。壁溝は幅10~20cm、深さ5cm前後で、径10~15cm、深さ5~8cmの小ビットが溝内を廻っている。主柱穴は、P1~P3・P5・P7の5本であるが、柱の配置からみて本来は7本柱と考えられる。柱穴規模は径30~40cm、深さ36~50cm、柱穴間距離は1.25~1.7mで、P3~P7、P7~P5間が短い。遺物は出土していない。SB 5aと5bの新旧関係は、5aの床面約10cm上に5bの貼床が存在すること、柱穴の配置状態、炉跡などから5aが古い。

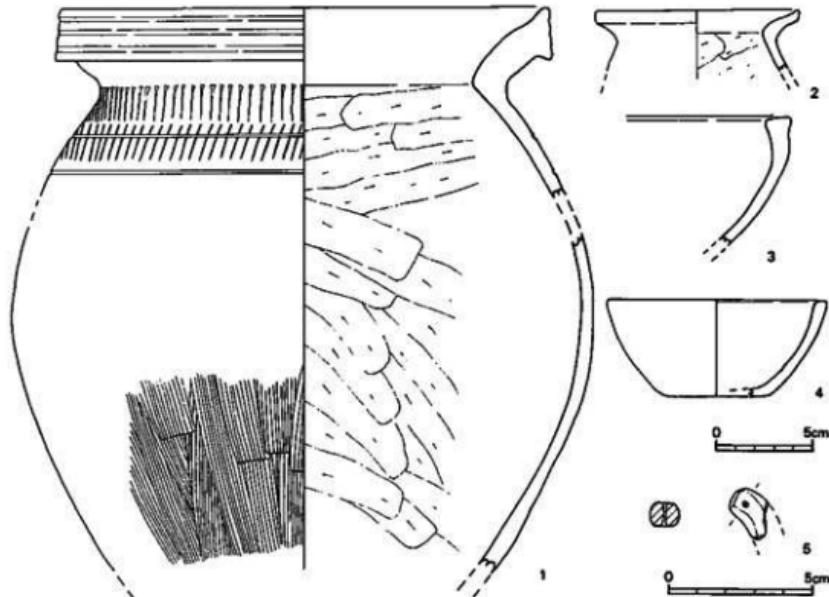


第4図 SB 5a・5b 実測図 (1:60)

S B 5 b の規模は径 6.2 m で、床面積は推定 30 m² である。現存する壁高は東側で 27 cm で、壁溝は幅 15 cm、深さ 10 cm である。壁溝内に径 10~20 cm、深さ 10 cm 前後の小ピットが廻る。主柱穴は P 1 ~ P 4 の 6 本柱かあるいは P 1 ~ P 3 + P 5 の 5 本柱と考えられる。柱穴間の距離は 6 本柱の場合 1.7~2.0 m、5 本柱の場合は 1.7~2.4 m である。柱穴は径 25~60 cm、深さ 50~61 cm である。覆土は暗茶褐色土で、住居跡の中央には長軸 1.35 m、短軸 1.0 m、深さ 18 cm の炉があり、炭や焼土が存在した。S B 5 b は 5a の床面上に明褐色土の貼床を約 10 cm 施して床面を形成し、炉跡と主柱穴の一部を共有することから、5a を四方に拡張し、建て替えたものと考えられる。出土遺物には甕・鉢形土器等のほか、土製勾玉、作業台石が出土している。S B 5 b の時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

出土遺物（第 5 図、図版 5）

1, 2 は甕形土器で、1 は復元口径 25 cm の大型品である。胴部は球形をなし最大径はほぼ中位にある。口縁部は頸部から強く屈曲し、やや肥厚して伸び、端部は上下に拡張している。口縁部外面に 3 条の凹線を、肩部には 2 条の沈線及びヘラ状工具による刺突文を施す。調整は口縁部内外面ともヨコナデ、胴部内面はヘラ削り、外面はハケ目を残す。2 は



第 5 図 S B 5 出土土器 (1:3) 及び土製品実測図 (1:2)

復元口径 10.6 cm で、口縁部は端部を上方に拡張している。調整は口縁部内外面ともヨコナデ、胸部内面はヘラ削り、外面は磨滅のため不明である。3・4 は鉢形土器で、3 は胸部からゆるやかなカーブで立ち上がり、口縁端部はやや肥厚し内傾する。調整は口縁部内外面ともヨコナデ、他は磨滅のため不明である。4 は復元口径 11.4 cm で胸部から口縁部はゆるやかなカーブで立ち上がり、端部は矩形である。調整は内外面とも磨滅が著しく不明である。5 は土製勾玉の頭部で、下半部を欠損している。現存長 1.7 cm、幅 1.1 cm、厚さ 0.8 cm で、頭部先端は平坦である。色調は暗灰色で、調整はナデを行っている。

S B 7a・7b (第 6 図、図版 2b)

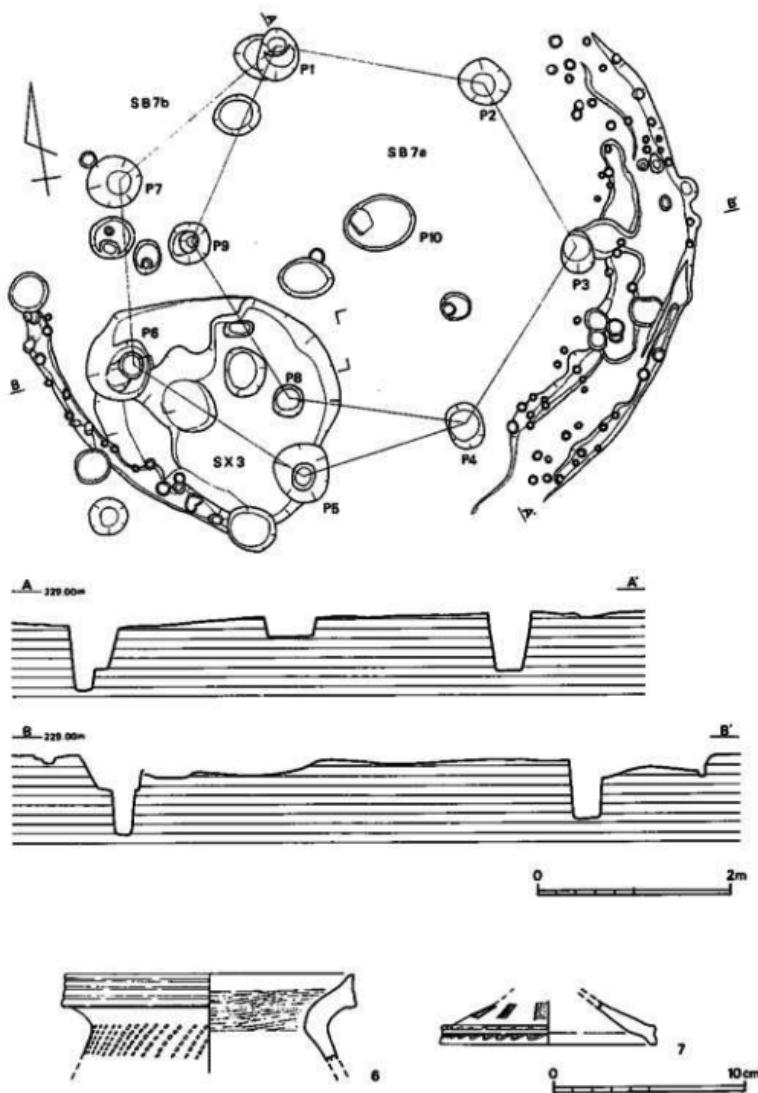
調査区の東部に位置し、北側には S B 5a・5b がある。内側の溝を伴う S B 7a、外側の溝を伴う 7b の 2 軒の重複が認められた。

S B 7a は復元径 5.2~5.5 m の平面形が円形の竪穴住居跡で、床面積は約 21~24 m² である。壁溝は東側に幅 12~16 cm、深さ 6~9 cm で廻り西側は S X 3 の削平のため明らかではない。径、深さとも 10 cm 前後の小ピットを溝の両肩から検出した。主柱穴は P 1~P 4・P 8・P 9 の 6 本で、P 1~P 4 は S B 7b と共有している。規模は径 32~50 cm、深さ 54~67 cm である。柱穴間の距離は P 4~P 8 間がやや短いが、その他は 2.0~2.2 m でほぼ等間隔である。住居跡中央に位置する P 10 から炭を少量検出しており、P 10 は炉跡と考えられる。遺物は P 8・P 10 から弥生土器(甕・高杯形土器)が出土しており、S B 7a は弥生時代後期前葉のものと考えられる。

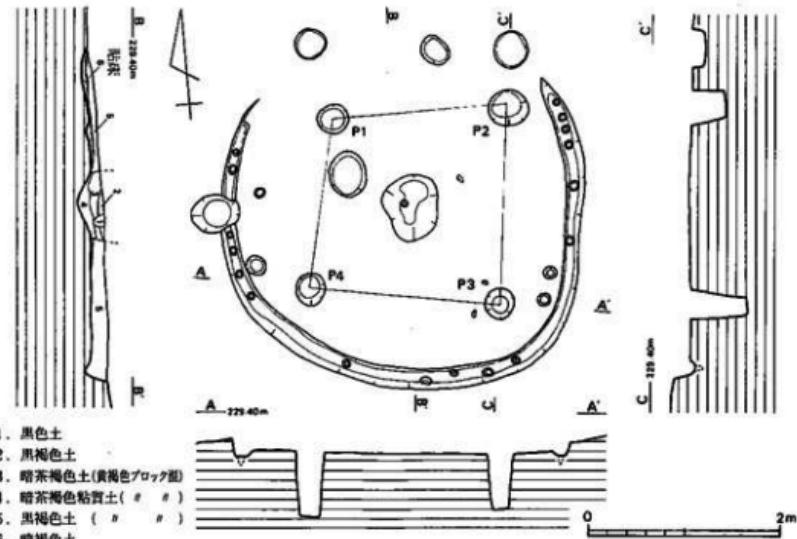
S B 7b は復元径 6.8~7.0 m の平面形が円形の竪穴住居跡で、床面積は約 36~38 m² である。東及び西側を廻る壁溝は幅 8~14 cm、深さ 6~16 cm で、径・深さとも 10 cm 前後の小ピットを多數検出した。西側の壁溝は掘立柱建物跡 S B 16 に切られており、北側に延びる可能性もあるが確認できなかった。主柱穴は P 1~P 7 の 7 本で、規模は径 32~64 cm、深さ 54~72 cm である。柱穴間の距離は P 4~P 5 間が少し短いが、その他は 2.0~2.2 m でほぼ等間隔である。S B 7a と 7b の関係は柱穴と壁溝の状態から 7a が古く、7b が床面及び柱穴の一部を利用して拡張したと考えられる。遺物は出土していない。

出土遺物 (第 6 図、図版 5)

6 は壺形土器口縁部である。復元口径は 15.0 cm で、口縁部は「く」字状に外反し端部を上下に拡張させ、外面に 3 条の凹線文を施している。肩部には櫛状工具による刺突文が廻っている。調整は内面ヘラミガキ、外面ヨコナデ、体部内面はヘラ削りで、色調は黒褐色である。7 は高杯形土器の脚据部である。復元径は 11.2 cm で、脚裾は大きく開き、端部を肥厚させ、櫛状工具による波状文を施した後ヨコナデを行っている。脚部外面には縦方向の櫛描



第6図 SB 7a・7b (1:60) 及び出土土器実測図 (1:3)



第7図 SB 2(1:60)及び出土土器実測図(1:3)

直線文を施している。調整は裾端部内外面ともヨコナデ、脚部内面はヘラ削り後ナデ調整を行っている。外面は磨滅により調整不明である。色調は内面暗灰色、外面淡茶褐色である。

SB 2 (第7図、図版2c)

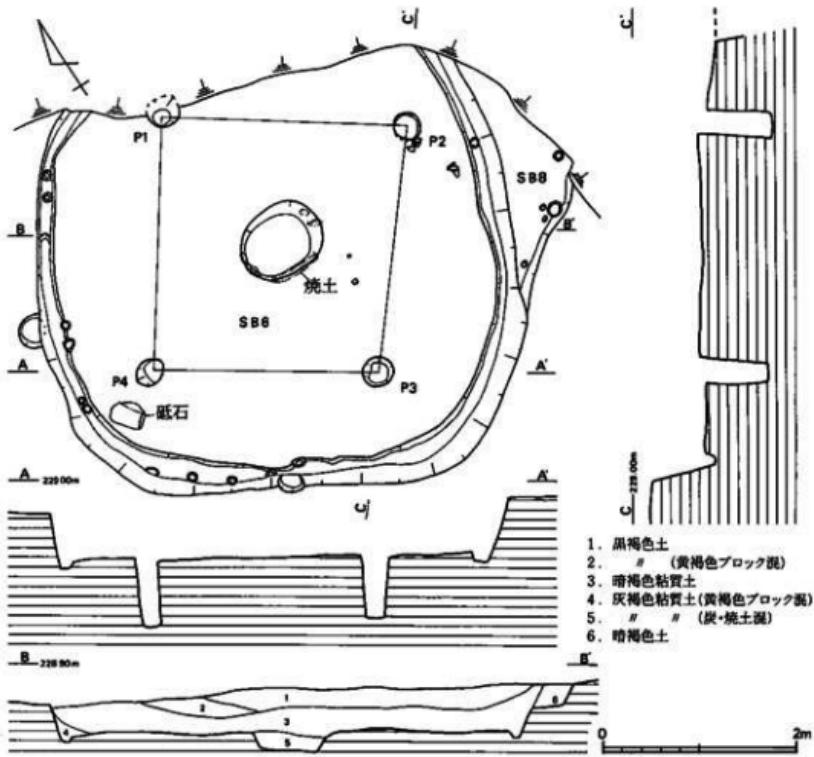
調査区の西南部、SB 10の南側に位置し、掘立柱建物跡SB 9によって切られている平面形がほぼ円形の竪穴住居跡である。規模は床面径で長軸3.8m、短軸3.6m、床面積は約13m²である。現存する壁高は南側14cmで、北側は消滅している。幅14~20cm、深さ3~7cmの壁溝が廻り、北辺で途切れている。溝内から径約10cm、深さ9~18cmの小ビットを検出した。住居跡内の覆土は黄褐色粘質土を含む黒褐色土であるが、北側は暗褐色土で貼床を施している。主柱穴は、P1~P4の4本で、規模は径30~40cm、深さ35~65cm、柱穴間の距離は1.8~2.0mでほぼ等間隔である。住居跡中央に位置する土壤は貼床を切り込んでおり、本住居跡よりも新しい。遺物は僅かで、床面から古式土師器の壺・鉢が出土しており、古墳時代初頭の住居跡と考えられる。

出土遺物（第7図、図版5）

8は甕口縁部で、やや外反して立ち上がり、端部は丸くおさめている。調整は内外面ともヨコナデ、色調は橙褐色である。9は鉢の完形品である。口径 9.4 cm、器高 3.7 cmで、平底気味の底部から外反しながら立ち上がり、口縁部は直立気味である。調整は内外面とも磨滅のため不明、色調は橙褐色である。全体につくりが雑で凹凸がはげしい。

S B 6 (第8図、図版3a)

調査区の東端に位置し、北側は農道によって削平されている平面形が隅丸方形の竪穴住居跡である。規模は1辺約4.5 mで、床面積は約20 m²である。現存する壁高は南側で57 cm、西側で32 cmである。壁溝は幅15~20 cm、深さ4~10 cmで、溝内には径・深さとも8~12 cmの小ピットが西及び南側に存在した。住居跡内の覆土は、黒褐色土・

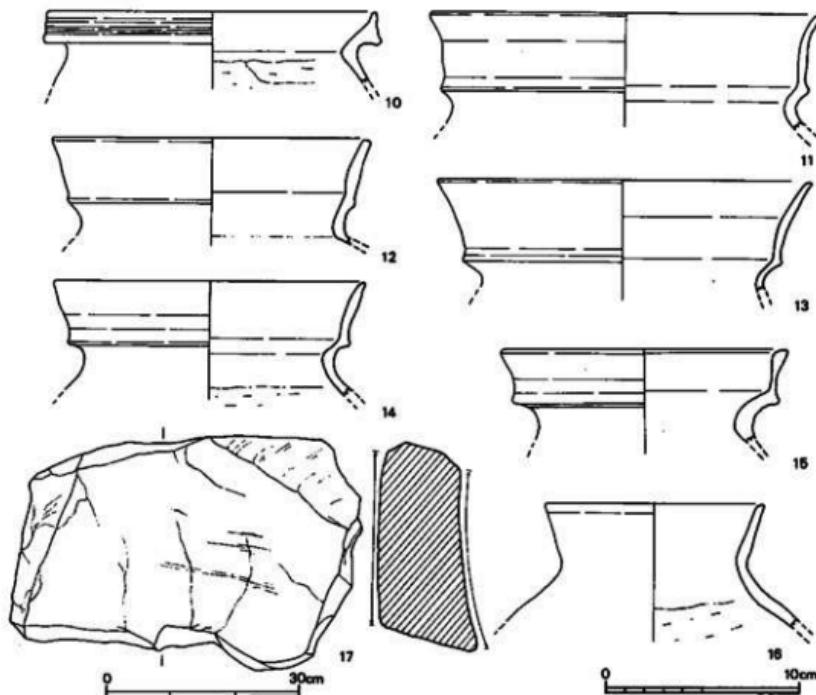


第8図 S B 6・S B 8実測図 (1:60)

黄褐色ブロック混入黒褐色土・暗褐色粘質土・黄褐色ブロック混入灰褐色粘質土の自然堆積であった。主柱穴はP1～P4の4本で、規模は径26～38cm、深さ63～71cm、柱穴間の距離は2.4～2.6mでほぼ等間隔である。住居跡の中央に長軸0.9m、短軸0.6m、深さ0.2mの炉跡があり、炭や焼土が存在した。住居跡の南側及び西側にある柱穴は壁を切り込んでおり、本住居跡に伴うものではない。住居跡西南隅から大型の砥石が出土した。床面出土の遺物はごく僅かで図示できるものは1点(第9図13)のみである。他の遺物はすべて覆土から出土している。本住居跡は古墳時代初頭のものと考えられる。

出土遺物(第9図、図版5)

10は弥生土器の変形土器口縁部である。復元口径は17.0cmで、頸部で「く」字状に外反し、端部は上下に拡張し外面に3条の凹線を施している。調整は内外面とともにヨコナデ、内面頸部以下はヘラ削りを施している。色調は淡黄褐色で、胎土は1～2mm大の砂粒を



第9図 SB 6出土土器(1:3)及び石器実測図(1:6)

多く含んでいる。11~14は土師器の甕である。ゆるやかに外反する複合口縁を持ち、端部が丸く終わるもの（11・12・14）と平坦面をもつもの（13）がある。11・14は口縁屈曲部の稜線がシャープで、ヨコナデによる稜線も明瞭である。調整は内外面ともヨコナデ、14は内面頸部以下にヘラ削りを施している。11は復元口径20.2cmで、色調は灰白色である。14は復元口径16.1cm、色調は淡黄褐色である。12は復元口径16.5cmで、器盤が厚くヨコナデによる稜線も不明瞭である。色調は内面淡橙褐色、外面淡茶褐色である。13は床面出土のもので、復元口径は19.5cmである。口縁部が大きく外反し、屈曲部上方は強いヨコナデを施している。色調は淡黄褐色で、胎土は細砂を少し含んでいる。15~16は壺形土器である。15は復元口径11.4cmで、外反気味の複合口縁を持つ。口縁端部は厚く肥厚させ端面をつくっている。頸部に1条の沈線を施している。調整は外面ヨコナデ、内面は磨滅のため不明である。16は復元口径11.4cmで口縁は肩部からゆるやかに外反しながら立ち上がり、端部は丸くおさめてある。調整は、口縁部外面ヨコナデ、脚部内面ヘラ削りを行い、他は磨滅のため不明である。色調は15・16とも淡黄褐色で、胎土は1~2mm大の砂粒が多く含んでいる。17は長さ15.0cm、幅10.1cm、厚さ7cmの大型の砥石で、上面及び下面を研磨面として使用している。石材は花崗岩である。

S B 8 (第8図)

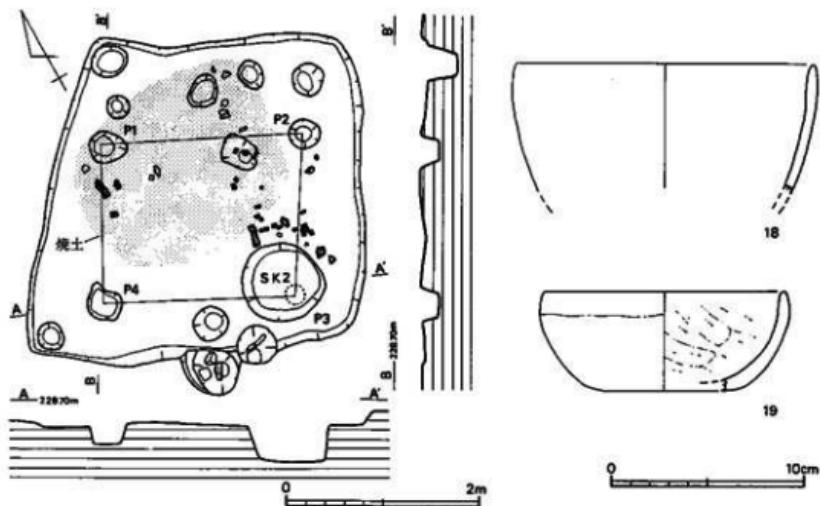
調査区東端に位置し、S B 6に切られた竪穴住居跡である。北側はS B 6と同様に、農道により削平されている。平面形は不明であるが、方形あるいは隅丸方形であろう。現存する壁高は約20cmで、壁の周辺に径10cm前後の小ピットが存在する。壁溝は廻っていない。床面出土遺物はなく、時期は不明である。

S B 3 (第10図、図版3b)

調査区の北西に位置し、掘立柱建物跡S B 14に切られている平面形が台形の竪穴住居跡である。規模は床面長辺3.4m、短辺2.7mで、床面積は約9m²である。現存する壁高は東側で15cm、西側で5cmと浅く、壁溝は廻っていない。主柱穴はP 1~P 4の4本と考えられるが、P 3は後から掘り込まれたSK 2によって破壊され、現存しない。規模は、径30~36cm、深さ17~24cmで、柱穴間の距離はP 1~P 2が2.1m、P 1~P 4が1.7mである。住居内覆土は暗褐色粘質土で、住居跡中央から炭・焼土が出土している。焼土は長軸2.2m×短軸1.8mの範囲で広がっており、焼失家屋の可能性がある。床面から鉢が出土した。遺物から6世紀の住居跡と考えられる。

出土遺物 (第10図、図版5)

18・19は鉢である。18は復元口径15.6cmで、体部からやや内湾気味に立ち上り、端



第10図 SB 3 (1:60) 及び出土器実測図 (1:3)

部は丸くおさめている。調整は口縁端部はヨコナデ、その他は磨滅のため不明である。色調は黄褐色で、胎土は細砂を少し含んでいる。19は復元口径12.7cmで、口縁部は内湾しながら立ち上がる。調整は、口縁部外面ヨコナデ、その他は磨滅のため不明である。色調は淡黄褐色で、胎土は1mm大の砂粒を少し含んでいる。

SB 1 (第3図)

調査区西南端に位置し、北側にはSX 1, SB 9がある。調査区外に延びるため、平面形は明らかではない。現存する壁高は4~10cmで、内側に幅20cm、深さ4~7cmの溝が廻っている。溝内から径10cm、深さ約3cmの小ピットを検出した。覆土は暗灰色粘質土で、床面はほぼ平坦である。住居跡に伴う柱穴は認められなかった。床面及び壁が軟弱で、平面形も不整形であるため、住居跡ではない可能性も考えられる。遺物は出土していない。

SB 4 (第3図)

調査区の北西端に位置する平面形が円形の竪穴住居跡で、南側にはSB 14がある。大半が調査区外に延びるため、規模は明らかではない。現存する壁高は約25cmで、内側に幅8~10cm、深さ4~10cmの溝が廻り、西側で途切れている。径14cm、深さ20cmの小ピット1基を確認したのみで、柱穴はみられない。覆土は暗茶褐色粘質土で、床面はほぼ平坦である。出土遺物はなく、時期は不明である。

(2) 挖立柱建物跡

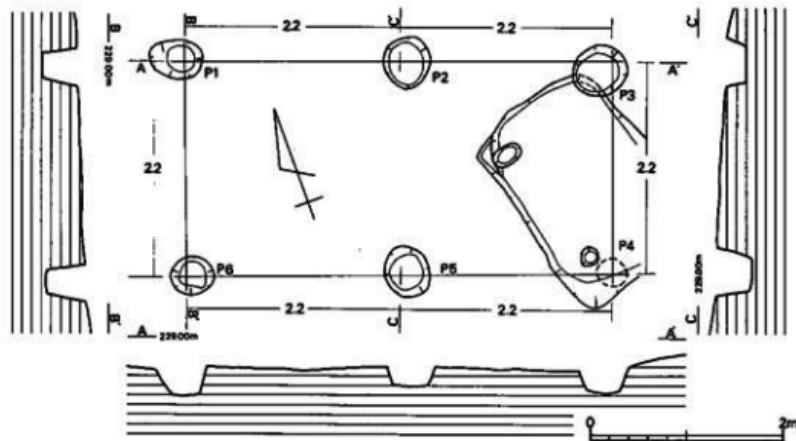
調査区全域から多数の柱穴を検出し、掘立柱建物跡 8 棟を確認した。1間×2間が 5 棟、1間×4間が 1 棟、2間×2間の縦柱が 2 棟である。柱穴からの出土遺物はごく僅かで、時期決定できるものは少ない。桁行方向等から I 群—SB 10・11・12・16, II 群—SB 13・14・15, III 群—SB 9 の III 群に分けられる。ただ、SB 13 と他の 2 棟とは方向がややずれるため、時期が異なる可能性もある。その他の柱穴は不明確な点が多く、建物としては確認できなかった。

SB 9 (第 3 図)

調査区西南端に位置し、SB 2 と重複している掘立柱建物跡である。桁行方向は N 32°E である。規模は桁行 2 間 (4.2 m) × 梁行 1 間 (2.1 m) で、柱間寸法は 2.1 m で等間隔である。柱穴規模は径 35~50 cm、深さ 15~20 cm で、北西及び東南隅の柱穴は確認できなかつた。柱穴内には暗茶褐色粘質土がみられた。遺物は出土していない。SB 2 との新旧関係は、本遺構が SB 2 を切り込んでいることから、本建物跡の方が新しい。

SB 10 (第 11 図、図版 3c)

調査区の西侧に位置し、南側には SB 2 がある。桁行 2 間 (4.4 m) × 梁行 1 間 (2.2 m)、桁行方向が N 71°W の掘立柱建物跡で、柱間寸法は全て 2.2 m と等間隔である。柱穴規模は径 50 cm 前後、深さ 30~40 cm で、柱穴内は暗灰褐色粘質土である。東南隅の柱穴は SX 2 と重複していたため、確認できなかつた。P 3 が SX 2 を切り込んでおり、本建物跡は S



第 11 図 SB 10 実測図 (1:60)

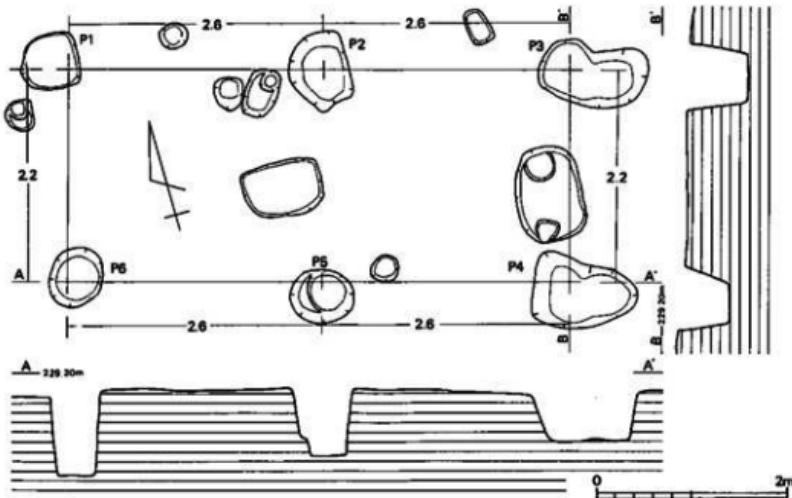
X 2 よりも新しい。P 5・P 6 から弥生土器が出土しているがいずれも細片である。

S B 11 (第12図、図版3c)

調査区のほぼ中央に位置し、S B 10 と並列している掘立柱建物跡である。規模は桁行2間(5.2m)×梁行1間(2.2m)で、柱間寸法は、桁行が2.6mである。柱穴規模は径60~70cm、深さ60cm前後と大規模で、P 3・P 4 は柱を抜き取った可能性がある。柱穴内には黄褐色粘質土ブロックを含む暗灰褐色土がみられた。出土遺物は、P 4 を除く柱穴から土器細片が数点出土したのみである。桁行方向がN 74°Wで、S B 10 とほぼ同じであることから、同時期の建物跡と考えられる。

S B 12 (第13図、図版4a)

調査区のほぼ中央に位置し、S B 13 と重複する縦柱の掘立柱建物跡で、桁行方向はN 14°~16°Eである。規模は、桁行2間(4.5~4.8m)×梁行2間(3.0~3.3m)である。柱間寸法は、桁行2.4m、梁行1.5mであるが、桁行はP 2-P 3間が2.1mと他より30cm短くなっている。梁行はP 1-P 6間が1.8mで他より30cm長くなっている。柱穴規模は径40~60cm、深さ30~50cmほどで、P 5・P 8・P 9は二段掘りになっており、径約20cmの柱が推定できる。出土遺物にはP 9からの須恵器杯蓋がある。S B 13との新旧関係は、P 5がS B 13のP 9によって切られており、S B 12が古く、時期はP 9出土の須恵器杯蓋



第12図 S B 11 実測図 (1:60)

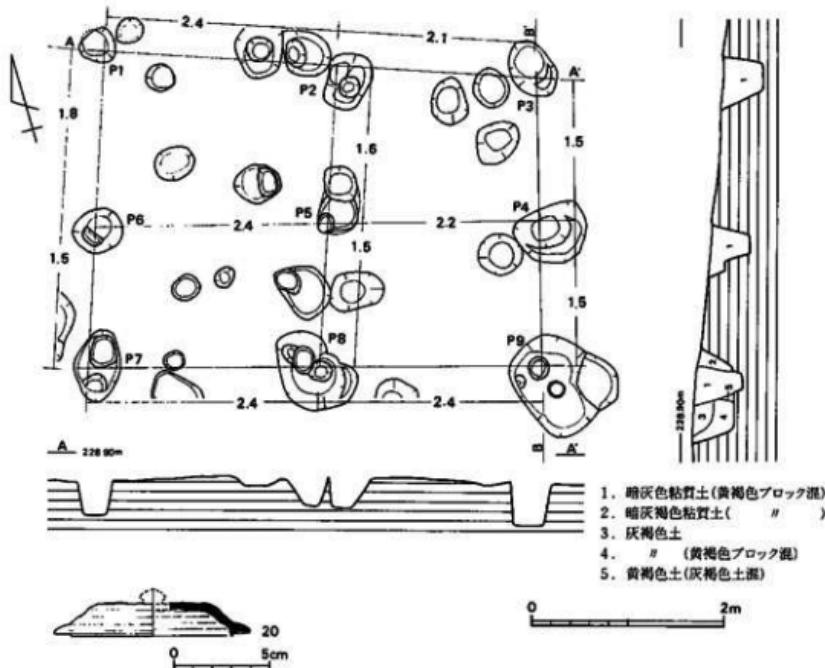
から7世紀中頃とされよう。

出土遺物(第13図、図版5)

20は須恵器杯蓋である。復元口径は8.4cm、天井部はほぼ平坦で、中央部には宝珠つまりの剥落痕がある。口縁部への移行は緩やかで口縁端部は丸くしあげてある。かえりは、口縁部よりも下方へ突出している。調整は内外面ともロクロナデ、色調は淡灰色である。

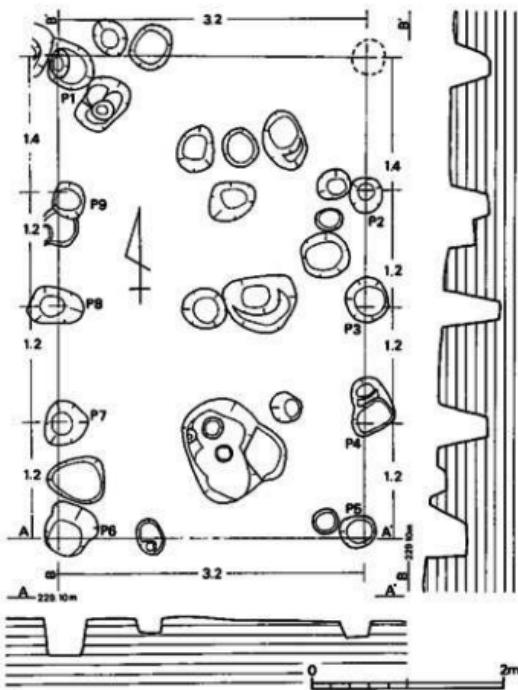
S B 13(第14図)

調査区のはば中央に位置し、S B 12と重複している掘立柱建物跡である。規模は桁行4間(5.0m)×梁行1間(3.2m)である。柱間寸法は桁行1.2mであるが、北側部分だけ1.4mと長い。梁行は3.2mと長く、中間1.6mの所に柱があった可能性も考えられる。桁行方向はN 1°Wである。柱穴は径32~58cm、深さ3.0~6.0mで、覆土は灰褐色土である。なお、P 5から土師器片が出土しているが、細片であるため時期は不明である。

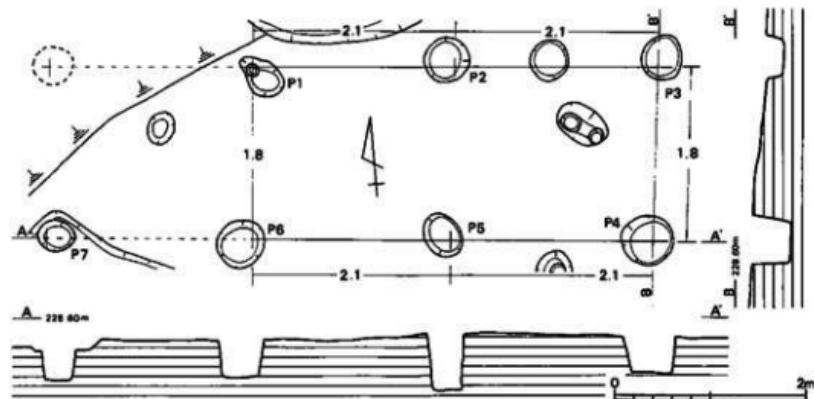


第13図 S B 12 (1:60) 及び出土土器実測図 (1:3)

S B 14 (第15図、図版4a)
 調査区の北西端に位置し、
 S B 3と重複する桁行方向N
 84°Wの掘立柱建物跡である。
 規模は桁行2間(4.2m)×梁
 行1間(1.8m)であるが、桁
 行はS B 3を切り込むP 7が
 対応して、3間以上になる可
 能性もある。柱間寸法は、桁
 行で2.1mと等間隔である。
 柱穴は径30~55cm、深さ25~
 40cmで、柱穴内には黄褐色粘
 質土ブロックを含む暗灰色粘
 質土がみられた。本建物跡の
 桁行を3間以上とすると、P
 7がS B 3の床面を切り込ん
 でおり、本建物跡の方が新し
 い。遺物は出土していない。



第14図 S B 13 実測図 (1:60)



第15図 S B 14 実測図 (1:60)

S B 15 (第3図, 図版4a)

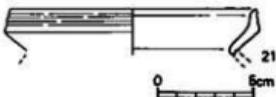
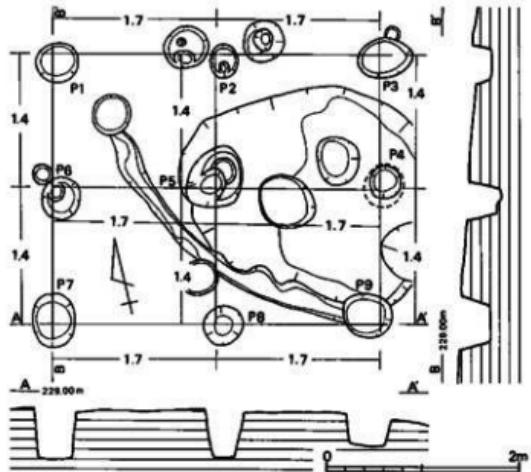
調査区の北側, S B 5とS B 14の中間に位置し, 西側のS B 14と並列している桁行2間(4.5m)×梁行1間(2.1m)の掘立柱建物跡である。梁行は調査区外に延びる可能性もあり, 2間×2間の総柱とも考えられる。柱間寸法は, 桁行2.1~2.4mである。柱穴は径40~50cm, 深さ10~30cmで, 柱穴内には茶褐色粘質土がみられた。桁行方向はN 85°WでS B 14と同方向であるため, 同時期の建物の可能性がある。東北隅の柱穴から土師器片が出土しているが, 細片のため時期は不明である。

S B 16 (第16図, 図版4b)

調査区の東側に位置し, S B 7a・7b, SX3と重複する桁行2間(3.4m)×梁行2間(2.8m)の総柱の掘立柱建物跡である。柱間寸法は桁行1.7m, 梁行1.4mと等間隔で, 柱穴規模は径40~50cm, 深さ20~50cmである。柱穴内には, 黄褐色粘質土ブロックを含む暗灰色粘質土がみられた。なお, P 4はS B 7aの柱穴P 8と重複していた。S B 7a・7bとの新旧関係は, P 5がS B 7bの柱穴P 6を切っており, 本建物跡が新しい。また, P 5・P 9はSX 3の覆土上から切り込んでおり, SX 3よりも本建物跡が新しい。桁行方向はN 72°Wで, S B 10・11・12と同方向であるため同時期の建物の可能性がある。出土遺物は, 弥生土器片1点が出土したが本建物跡に伴うものではないと考えられる。

出土遺物 (第16図, 図版5)

21は変形土器口縁部で, 復元口径は12.9cmである。やや内傾しながら「く」字状に立ち上がり, 外面には2条の凹線文を施している。調整は内外面ともヨコナデである。色調は淡黄褐色で, 胎土は細砂を多く含んでいる。

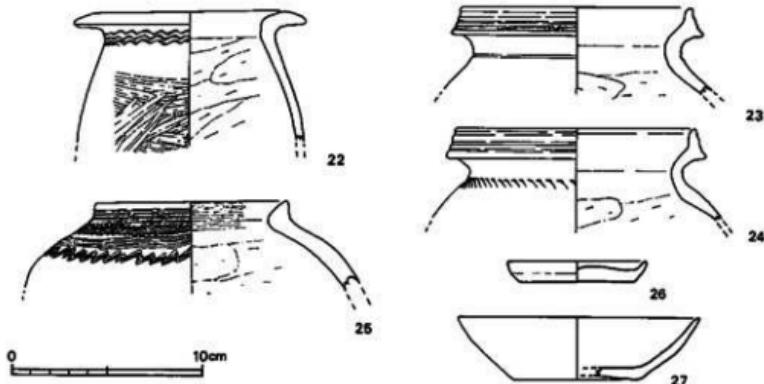


第16図 S B 16 (1:60) 及び出土土器実測図 (1:3)

柱穴内出土遺物(第17図、図版5)

22~25は調査区の北西、SB 14の北側に位置する径35cm、深さ60cmの柱穴出土のもので、24は上層、22・23・25は中~下層から出土した。22~24は壺形土器で、22は口縁部を単に外側に折り曲げ成形しており、頸部には波状文を3~4条施している。調整は口縁部内外面ともヨコナデ、体部内面ヘラ削り、外面ヘラミガキを行っている。色調は淡黄褐色、胎土は1~2mm大の砂粒を含んでいる。23・24は口縁端部を上下に拡張し、外面に3~4条の凹線文を施している。23は頸部に1条の沈線を、24は頸部にヘラ状工具による刺突文を廻らせている。調整は口縁部内外面ともヨコナデ、体部内面ヘラ削り、外面ヨコナデを残す。23は復元口径12cm、色調は淡黄褐色~淡灰色、胎土は1mm大の砂粒を含んでいる。24は口径12.5cm、色調は淡黄褐色、胎土は1~2mm大の砂粒を多く含んでいる。25は短頸壺である。体部は肩が張り、口縁部は直立し、わずかに延びる。肩部~口縁部に櫛状工具による直線文と波状文を廻らせている。調整は口縁部内面ヘラミガキ、体部内面ヘラ削り、外面ナデを施している。色調は淡灰色~淡黄褐色、胎土は精緻である。

26・27はSB 7aの壁溝を切り込んで造られた径20cm、深さ20cmの柱穴から出土した土師質土器である。26は復元径7.1cmの皿で、底部は糸切り底で、体部はやや内湾気味に立ち上がる。調整は内外面ともロクロナデ、色調は淡赤褐色、胎土は石英・長石を少し含む。27は復元口径12.8cmの杯で、底部は糸切り底で、体部はやや内湾して立ち上がる。調整は内外面ともロクロナデ、色調は淡黄灰色、胎土は細砂を少し含んでいる。



第17図 柱穴内出土土器実測図(1:3)

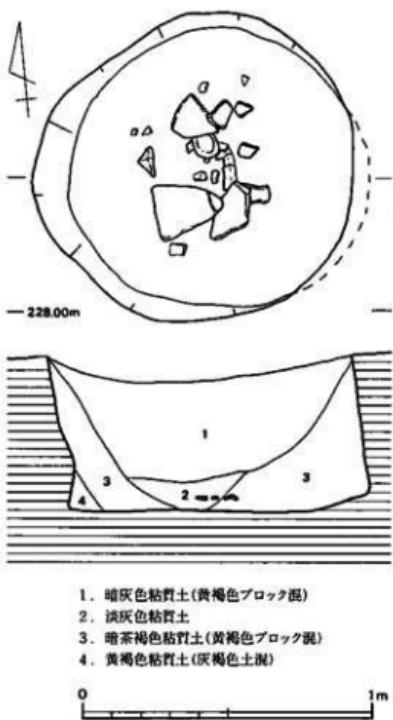
(3) 土壙

SK 1 (第18図、図版4c)

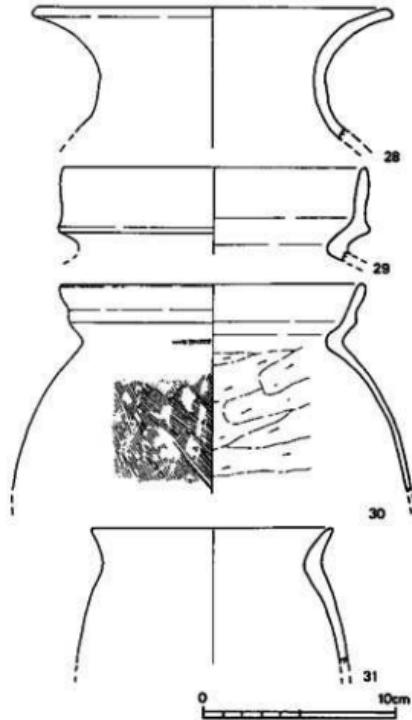
調査区の北西部、SB 3の東側に隣接する円形の土壙である。規模は径 1.1×1.0 m、深さ0.55mで、壁は西側が少し袋状に張り出しが、他の壁面はほぼ垂直である。土壙上面から角礫が出土した。遺物には土師器（壺・壺）があり、貯蔵穴であろう。

出土遺物 (第19図、図版5)

28は復元口径18.0cmの壺で、口縁部は外反し、端部は丸くおさめている。外面とも磨滅が著しく、調整は不明である。29・30は複合口縁を持つ壺である。29は復元口径15.6cmで、口縁部が「く」字状に屈曲し、ほぼ垂直に立ち上がる。調整は外面ヨコナデ、内面は磨滅のため不明である。30は口径15.6cmで、口縁部は緩い段を持ち外に開き体部下半を欠くが、最大径は中位に持つと思われる。調整は口縁部内外面ともヨコナデ、



第18図 SK 1実測図 (1:20)



第19図 SK 1及びSK 2出土土器実測図 (1:1)

体部内面はヘラ削り、外面は細いハケ目を施し、煤が付着している。

S K 2 (第10図)

調査区の北西に位置し、S B 3 を掘り込んで作られた円形土壙である。規模は径 0.9 m、深さ 0.4 m で、壁はほぼ垂直である。覆土は上層が黒褐色粘質土、下層が黒褐色土と黄褐色粘質土の互層で、下層から土師器（甕）が出土している。貯蔵穴の可能性がある。

出土遺物 (第19図)

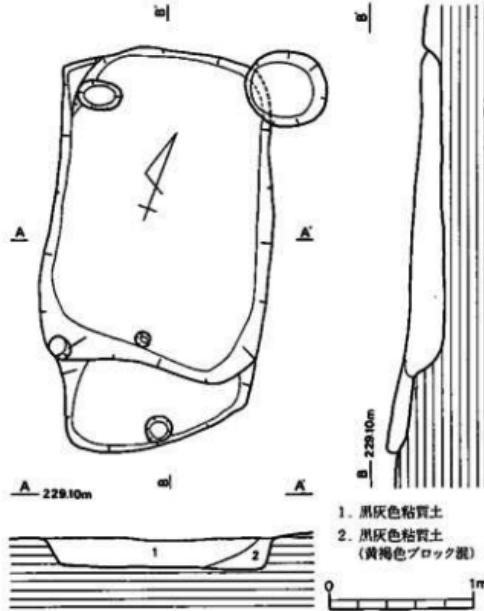
31は復元口径 12.5 cm の甕である。肩の張らない体部からゆるやかに外反する口縁部をもつ。磨滅が著しいため、調整は不明である。色調は淡黄褐色である。

(4) その他の遺構と遺物

S X 1 (第3図)

調査区西端に位置し、大部分は調査区外に延びるため平面形は不明である。規模は現存径 3.8 m、深さは 0.75 m、断面は「V」字状をなしており、覆土は黄灰色土である。遺物の出土はなく本遺構の性格は不明である。

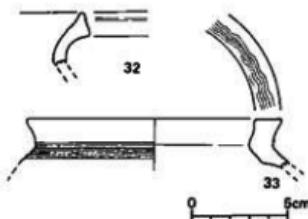
S X 2 (第20図)



調査区西側に位置し、S B 10 に切られている。規模は長辺 2.2 m、短辺 1.5 m、深さ 0.25 m で、平面形は長方形で、南側に深さ 10 cm のテラスがある。覆土中から甕形土器口縁部や短頸壺形土器の口縁部片が出土しているが本遺構の性格は不明である。

出土遺物 (第20図)

32は甕形土器の口縁部破片で、



第20図 SX 2 (1:40) 及び出土土器実測図 (1:3)

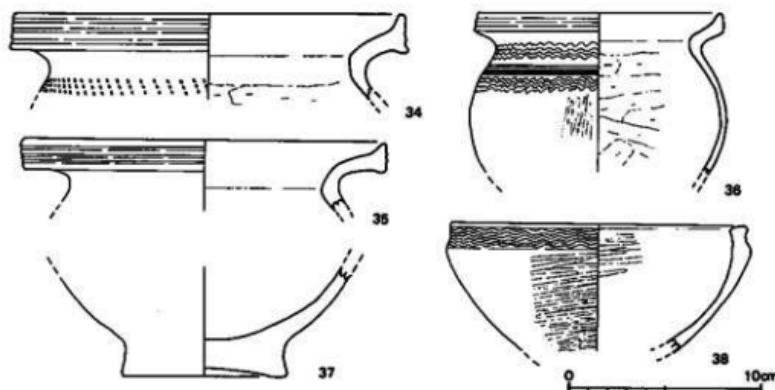
頭部が「く」字状に外反し、端部を僅かに拡張させている。調整は内外面ともヨコナデ、色調は淡黄褐色である。33は復元口径13.2cmの短頸壺形土器の口縁部で、やや外反気味に直立している。端部は面を持ち5条の波状文を施している。調整は外面ヨコナデ、内面頭部以下ヘラ削りを施している。色調は内面暗灰色、外面淡黄褐色である。

S X 3 (第6図)

調査区の東側に位置し、SB7、SB16に切られている不整形の落ち込みである。規模は長軸2.6m、短軸2.1m、深さ4~10cmであるが本遺構の性格は不明である。なお、弥生土器片が出土しているがいずれも細片である。

包含層出土遺物 (第21図、図版5)

34・35は壺形土器で、口縁端部を上下に拡張し、外面に凹線を施している。34は復元口径20.1cmで、肩部に櫛状工具による刺突文を廻らせてている。調整は口縁部内外面ともヨコナデ、体部内面にヘラ削りを施している。35は復元口径18.4cmで、調整は磨滅が著しく不明である。36は復元口径12.6cmの小型の壺形土器である。体部は球形で、口縁部は上方に拡張しており、肩部に4条の直線文と波状文を2段に廻らせてている。調整は口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面ヘラ磨き、内面ヘラ削りを行っている。37は壺形土器あるいは壺形土器の底部で、底径8.6cmで平底をなす。調整は磨滅が著しく不明である。38は鉢形土器で、復元口径15.2cmである。体部はゆるやかにカーブし、やや内湾気味に立ち上がり、口縁部と体部の境で屈曲し段を持ち、6条の波状文を施す。口縁端部はやや内傾し、面を形成している。調整は口縁部ヨコナデ、体部内外面ともヘラ磨きを施している。



第21図 包含層出土土器実測図 (1:3)

V ま　と　め

今回の調査では、弥生時代後期から中世にかけての集落跡を確認した。本遺跡の詳細については、調査区が限定されていたこともあり、十分な検討を行うことはできないが、範囲については試掘調査の結果、A調査区を南端、B調査区を北端と想定されていたが、今回の調査の結果、若干北側に広がることが考えられる。また、遺跡の年代も当初弥生時代及び古墳時代と考えられていたが、平安時代や中世にも利用されており、丘陵尾根緩斜面に位置し、小河川に近いなどの立地からも、集落跡として適地であったことが窺える。なお、生産基盤である水田は、本調査区よりやや下がった生田川の沖積地が想定できる。また、鞍掛古墳群は、本遺跡を見下ろす位置にあり、古墳時代の集落跡として本集落との関連が考えられよう。

弥生時代の竪穴住居跡は、2軒とも建て替えを行っており、新旧関係はそれぞれSB7a→7b・SB5a→5bである。SB7a出土の菱形土器は口縁部を上下に拡張し、僅かに内傾し外面に凹線文を施している。これは庄原市西山遺跡2号住居跡出土土器¹⁰⁾に類似しており、後期前半に比定される。また、SB5b出土土器には、口縁部が直立気味のものや、単に上方にのみ拡張し、凹線文が退化した菱形土器もみられ、これらの特徴から後期中葉に比定できよう。また、SB7とSB5がごく近接して造られていることから4軒は次々に建て替えられたことになる。

次に古墳時代の竪穴住居跡であるが、SB6出土の甕は複合口縁で、端部は僅かに面を持ち頸部からの屈曲部はそれほど明瞭ではない。これは庄原市永宗遺跡第1号住居跡出土土器に類似している¹¹⁾。また、SB2もほぼ同時期のものと考えられる。SB3の出土遺物には、時期決定には不確実ではあるが土師器があり、須恵器を伴わないこと、SB3を切り込んでいるSK2から6世紀後半の甕口縁部が出土していることなどから、SB3は6世紀後半より古く、それ以前の時期で6世紀前半～中頃と推定される。

掘立柱建物跡8棟は、出土遺物が僅かであるため明確な時期はとらえ難いが、桁行方向や柱間構造等から3～4群に分けられよう。I群—SB10・11・12・16の4棟で、その構成は1間×2間の建物2棟と2間×2間の倉庫2棟からなる。桁行方向が4棟はN71°～74°Eで、ほぼ同一方向である。SB12の柱穴から7世紀中頃の須恵器杯蓋が出土しており、I群はこの時期が当たられる。また、A調査区の住居跡状遺構から7世紀代の土師器及び須恵器が出土している。A調査区とB調査区との間は約30m離れており、この間は未調査であるが、こうしたあり方からすると、さらに数棟の建物跡が存在していることが推定される。

II群—SB 13・14・15の一群である。SB 14・15は桁方向がN 84°～85°Wとほぼ同じ方向で、2棟が並立しており、柱間構造も同様の様相を示している。ただSB 13は桁行方向N 1°EでSB 14・15とはややずれ、柱間構造も桁行に比べ梁行が長いなど他の2棟とは異なった様相を示しており、時期的に異なる可能性がある。SB 13の柱間構造は建築学的には平安時代に該当するものと考えられる⁽³⁾。遺物は細片しか出土しておらず時期決定できるものはない。ただSB 14を桁行3間以上の長屋状の建物とすると、SB 3との切りあいからみてII群は6世紀以降の建物跡となる。

III群—SB 9が該当する。I群・II群がほぼ桁行を東西方向に配列しているのに対し、本建物のみN 32°Eと全く別方向を示す。A調査区で桁行3間(8.1m)×梁行1間(3.4m)の桁方向に両面庇のついた建物跡が検出され、中世後半の年代が当てられている。桁行方向N 60°Wで、SB 9とほぼ直角方向に位置するため、同時期の建物の可能性がある。また、これらの建物跡以外に、SB 7を切り込んでいる柱穴から15世紀代の皿・杯が出土しており、この時期の建物の存在も考えられる。

以上のように掘立柱建物跡は古墳時代後期～室町時代前半のものと考えられる。県内における古墳時代後期の住居跡は竪穴住居跡が一般的で、掘立柱建物跡が群構成をなしているものには深安郡神辺町大宮遺跡⁽⁴⁾が挙げられる。この遺跡の建物群は6世紀中頃～7世紀中頃の豪族の居宅と考えられているが、建物に方向性があり、群構成がみられるなどのことは本遺跡と似た様相を示している。現在のところ掘立柱建物跡の検出例は少なく、今後の類例を待たねばならないが、山間部においてもある程度早い時期に掘立柱建物で集落を構成していたことが窺える。また搬入品と考えられる暗文を配した土師器高杯がA調査区から出土しており、畿内との何らかの関連も考えられよう。

その他、貯蔵穴と考えられるSK 1・SK 2は、出土遺物からSK 1は5世紀中頃、SK 2は6世紀後半のものである。これらの時期の住居跡は今回は検出されていないが、調査区外にその存在が予想される。

(註)

- (1) 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「西山 小和田 永宗」昭和57(1982)年
- (2) 註(1)と同じ。ここでは青木V・VI～VII期、出雲地方の編年鍵尾II式期にあてている。
- (3) 奈良国立文化財研究所の宮本長二郎氏の御教示による。
- (4) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「大宮遺跡発掘調査報告書 兼代地区II」昭和61(1986)年

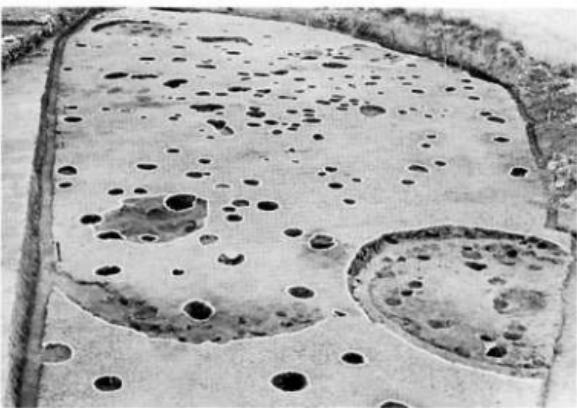
a. 遠 景

(西から)



b. 全 景

(東から)



c. 全 景

(西から)



a. SB 5a・5b

(南から)



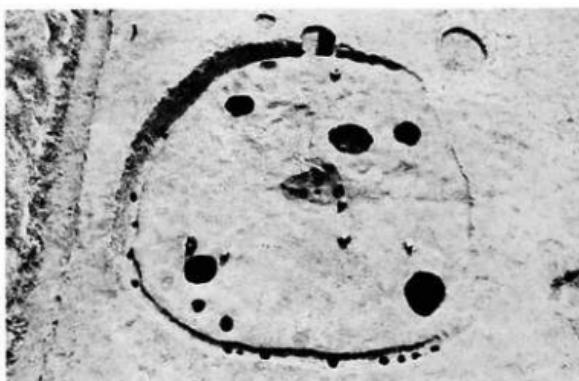
b. SB 7a・7b

(南から)



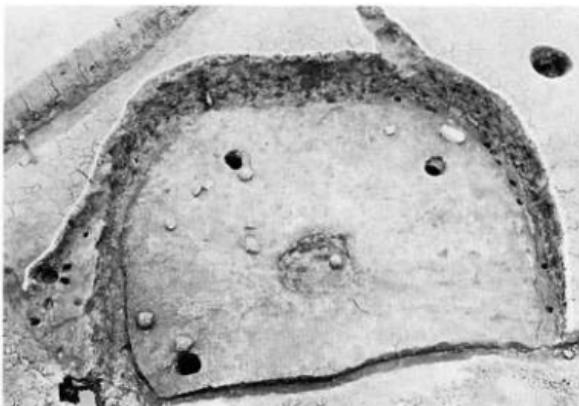
c. SB 2

(東から)



a. SB 6

(北から)



b. SB 3

(南から)



c. SB10・11

(東から)



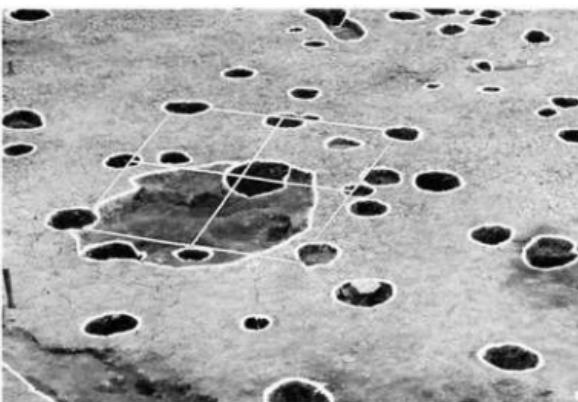
a. SB12・14・15

(西から)



b. SB16

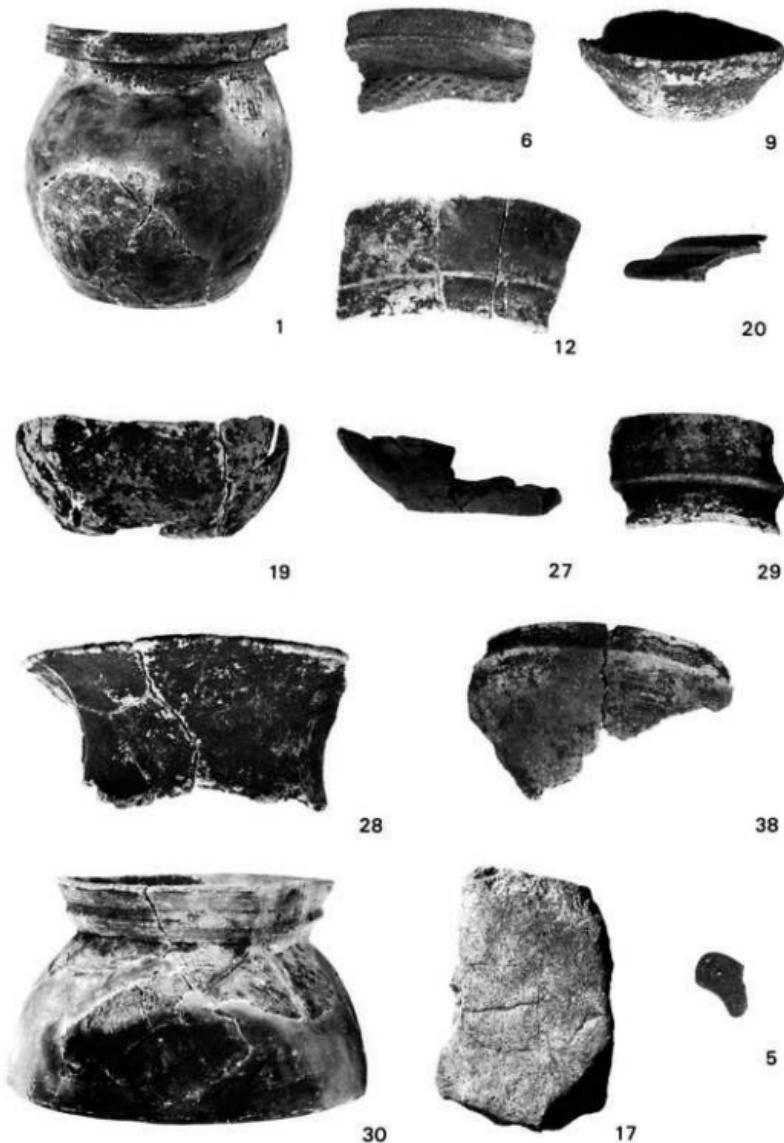
(東から)



c. SK1

(南から)





出土 遺 物

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第56集

名 広 遺 跡
— B 調 査 区 —

発行日 昭和 62 (1987) 年 3 月

編集・発行
財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター
733 広島市西区鏡音新町4丁目8-49
TEL (082) 295-5751

印 刷 電 子 印 刷 株 式 会 社